

「野口英世アフリカ賞」の運営の改善に向けた有識者懇談会（第2回）

議事概要

1. 日 時 令和2年8月20日（木）17:00～18:00

2. 場 所 中央合同庁舎8号館928会議室

3. 出席者

（委員）

池上 清子 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授

黒川 清 政策研究大学院大学名誉教授

杉下 智彦 東京女子医科大学教授

ピーター・ピオット ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（英国）学長

ミリアム・ウェレ モイ大学（ケニア）前総長

（政府側）

渡邊 清 内閣府大臣官房政策立案総括審議官

村田 優久夫 内閣府大臣官房企画調整課野口英世アフリカ賞担当室長

4. 議事概要

（1）オブザーバーの変更と第2回懇談会の議題説明

○ 事務局から、8月1日の内閣府人事異動に伴い、有識者懇談会の政府側のオブザーバーの変更があったことを報告した。

○ 事務局から、第2回懇談会の議題について、次のように説明した。

- ・ 第1回会合では、「公募方法の改善」を中心に議論いただく予定であったが、このテーマ以外に、「選考委員・プロセス・基準」、「広報の強化」に関しても意見が出された。第2回会合は、前回議論されなかった、「選考委員・プロセス・基準」のうち、以下の論点について議論いただきたい。

- ① 選考委員の出身母体の問題
- ② 今後の活動へのインパクトを推薦フォームの項目に入れるべきかどうか
- ③ 選考委員の公表のあり方
- ④ 新型コロナ・ウィルス感染症の拡大の下での選考委員会の活動のあり方

- ・ また、広報強化についてより深化した議論をお願いしたい。

（2）委員による議論

○ 「選考委員の出身母体の問題」について、次のような議論があった。

- ・（黒川座長）前回の議論で、ピオット委員から WHO と選考委員会との関係について議論が出た。選考委員会において、WHO の現役の職員等が選考委員になるべきではないとの考えと思う。
 - ・（ピオット委員）利益相反を避けるために必要と考える。
 - ・（黒川座長）WHO の幹部は国際公務員であるものの、出身国から圧力を受ける可能性もある。選考委員会の中立性、独立性を担保する必要がある。
 - ・（池上委員）WHO と同様 JICA も野口英世アフリカ賞の「関係者」という位置づけで見られており、選考委員から外するのが妥当と思う。推薦されるべき有資格者を多く知っている現場の WHO や JICA には、選考委員ではなく、推薦者として、貢献していただきたい。この考え方は、WHO 以外の国連機関やアフリカ地域の国際機関にも同様に適用されると考える。
 - ・（杉下委員）過去の選考委員会には JICA、USAID、世銀、WHO Afro 等の機関出身の委員が存在した。自分自身（杉下委員）も JICA グローバルヘルスアドバイザーの肩書を有している。UNICEF、WHO、世銀、UNDP、JICA、UNAIDS などの公的機関と何らかの関係のある選考委員は多い。開発に携わる者の多くはこれらの機関からいくらかの手当を受けている。選考委員任命を避けるべきは、フルタイムでこれらの機関に雇用されている者とすべきと考える。
 - ・（池上委員）フルタイムのこれらの職員は選考委員から排除されるべきと考える。
 - ・（黒川座長）利益相反の問題を回避するために、フルタイムで雇用されている援助機関、国際機関の職員は、医療活動分野の選考委員に任命することを避けることを原則とすることに各委員は同意している。この点を有識者の見解として報告したい。
- 「今後の活動へのインパクトを推薦フォームの項目に入れるべきかどうか」について、次のような議論があった。
- ・（杉下委員）今後の活動ないし将来のキャリアのビジョンないし、やるべきことを応募フォーマットに記述するべきと考える。なぜならば過去だけではなく、現在進行形の活動に対して賞が授与されるからである。将来の活動の全体像は重要である。賞を得る上で「これこれしかじかの活動をするため」と推薦フォームに記述することは普通のことと思う。
 - ・（池上委員）将来のキャリア、活動につき記述するのはよいことと思う。
 - ・（黒川座長）被推薦者の将来の活動について記述する理由がわからない。今までの全ての受賞者は野口英世及びこの賞の偉大な広報大使になって活動している。従って、将来の活動について記述する必要性は見えない。被推薦者が受賞後どのような活動をするかは選考委員会の見識にかかっているのではなかろうか。
 - ・（ウエレ委員）将来の活動のインパクトだけではなく過去の功績が重要である。第1回賞の2人の受賞者は業績も将来のインパクトも十分に知られた人物であった。過去も将来もいずれも重要である。
 - ・（池上委員）将来の活動のインパクトを記載するには推薦者と被推薦者の関係が緊密でなければ

できない。この項目を入れることで推薦者と被推薦者の関係性が明らかになる。その意味でこの項目を含めることに賛成する。

- ・（黒川座長）野口英世の事蹟は海外では知られていない。今までの6人の野口賞受賞者は野口英世の事蹟を知るに至り、野口英世のファンになり、世界中で野口英世と野口賞の広報をしている。従って、将来の活動へのインパクトをなぜ記述しなければならないのか。
- ・（ウエレ委員）座長の指摘の通り、受賞者は野口賞と野口英世の業績を称える大使として活動している。被推薦者の過去、現在そして将来の活動のすべてが重要である。

○ 「選考委員の公表のあり方」について、次のような議論があった。

- ・（杉下委員）野口英世アフリカ賞委員会（親委員会）のメンバーは公表されている。その下にある2つの選考委員会も公表したほうが良いと思う。
- ・（黒川座長）医学研究と医療活動の2つの選考委員会の委員長は公表してもよいかもしれない。受賞者に関して質問される可能性があり、それらの質問に答えるのが委員長の役割でもある。
- ・（ウエレ委員）親委員会と2つの選考委員会の議長の3人の公表を支持する。

○ 「新型コロナ・ウィルス感染症の拡大の下での選考委員会の活動のあり方」について、次のような議論があった。

- ・（池上委員）新型コロナ・ウィルス感染症の状況次第であるが、アフリカへ、または、日本への、委員会開催のための移動が無理そうであれば、選考委員会自体も、必然的に Online で行わざるを得ない。もし、アフリカ内外の移動が可能な地域・国があれば、Hybrid で行うことも可能と思う。
- ・（杉下委員）Online による先行プロセスに関し、各部門の選考委員会の最終選考に残る3人に online でインタビューし、活動等に関する確認ができればよいと思う。今まではやってこなかったが、新型コロナ・ウィルス感染症によって Online が日常化しており、活用できればと思う。
- ・（池上委員）Online だけに頼るのは問題がある。本日の会議のように通信状況によって不公平が生じる場合がある。
- ・（ウエレ委員）この点は重要であり、自分（ウエレ委員）も本日の通信状況が悪く議論がよく理解できない。従って、Online は問題がありうる。
- ・（黒川座長）Online の活用は新型コロナ・ウィルス感染症の状況次第であるので、まずは今後の状況を見ることにしたい。他方、過去の本賞の審査、または他の国際賞での審査では書類審査のみで実施している。候補者に直接インタビューすることはない。本人ではなく間接的に本人に関する情報を得るべきである。
- ・（杉下委員）将来の活動に対して公表された情報について確認するための目的で本人にインタビューができればよいと考えた。
- ・（池上委員）e-mail でも確認できると思う。

- ・（黒川座長）いずれにせよ本人に直接コンタクトすることはない。情報の確認が必要な場合は、本人を知る別の者に確認する。
- ・（池上委員）新型コロナ・ウイルス感染症関連の応募内容の選考プロセスに関しては、新しい薬剤関連、免疫システム関連などの治療に関連する研究は医学研究分野で扱うことが可能だと思う。一方、ケアや予防活動は、医療活動でとりあげることは可能だが、その活動成果が十分証明されていないとか、量的な証明を示す数字が不足している可能性も大きい段階かと思う。今後の動きを見ながら、専門家から、どのような指標をとることが可能かなどの選考基準に関する提案をもらえないだろうか。もう一つのやり方としては、選考委員の中に、新型コロナ・ウイルス感染症の専門家を入れ、しっかりとした議論が委員会内でもできるような体制づくりを提案する。
- ・（黒川座長）野口賞はアフリカに関する賞であるので、現時点では新型コロナ・ウイルス感染症がアフリカにとって重要なテーマになるかどうかはわからない。特にアフリカに関連するかどうか。
- ・（ウエレ委員）野口賞を新型コロナ・ウイルス感染症だけに限るべきではない。新型コロナ・ウイルス感染症はアフリカにおける疾病の一つでしかない。新型コロナ・ウイルス感染症拡大以前にその他の疾病で偉大な研究・医療活動を行ってきた者は多くいる。

○ 「広報の強化」について、次のような議論があった。

- ・（杉下委員）民間の保健衛生業界への広報も有効と考える。薬剤、医療機器、IT 企業も関連させ、野口賞に関する情報を提供すれば、候補者を推薦すると思う。
- ・（池上委員）日本のみならず、アフリカそして国際的な市民社会団体、NGO も同様である。今まではそれらからの推薦が出ていない。
- ・（ウエレ委員）野口賞の広報は大変重要であり、現状以上に野口賞が日本及びアフリカで周知されていくべきである。アフリカに居住するアフリカ人として述べるが、日本政府がアフリカにフォーカスした科学的国際賞を創設したことは大きな動きであり、アフリカを大いに勇気づけるものであることを本日再び強調したい。

(5) 今後の進め方について

- 事務局から、今後の進め方について次のように説明を行い、委員に了承された。
- ・ 第1回、第2回の会合を基に、総理に提出する報告案を作成し、各委員に送付するのでコメント等を事務局に送付いただき、報告書原案を作成する。それを基に10月15日に行う第3回会合で報告書案全体に関する議論を行っていただくこととしたい。